

イベントレポート 『2011 GT耐久東海シリーズ 第2戦』

開催日 2011年5月15日(日)

9:30 決勝スタート 12:25 チェッカー

天候 晴れ

最高気温 24.5 (12時)

場所 スパ西浦モーターパーク

参加台数 15台

開幕戦が東日本大地震の影響で開催が約1ヶ月スライドしたため、第1戦からわずか4週間のインターバルでの開催となった第2戦。今回も「東日本大震災チャリティーイベント」して開催され、会場の募金箱には多くの寄付が寄せられた。

レースは五月晴れで初夏を思わせる陽気の中、15台のマシンが熱い戦いを繰り広げた。



「1+2」クラス(1500cc以下のNA車と、1200cc以下のターボ車)

開幕戦では昨年のチャンピオンNo.110「アライメント浜松シティー」が磐石の勝利を収めたこのクラス。

前回2位のNo.16「プロジェクトスターレット」はラップタイムではトップと肩を並べる健闘を見せたが、今回は欠席となったためにNo.110の優位が予想される。

また、No.86「マーチ&スワフト屋のマーチ」は排気量が1000cc未満ということで、3回の義務ピットインでそれぞれピット時間3分短縮のハンディーをもらえる。このハンディーを活かしてトップに迫ることができるのか。



予選

フリー走行のラスト5分を使って行なわれる予選で、1番手のタイムを叩き出したのはNo.110「アライメント浜松シティー」。タイムは1'02.305をマークし、総合でもポールポジションとなる好位置を獲得する。

予選2位は前戦で3位となったNo.56「COCKPIT高橋N+EP91」でタイムは1'05.244。

3位のNo.449「金沢工業大学スターレット」は学生のみで構成されたチームで、タイムは1'09.800。

No.86「マーチ&スワフト屋のマーチ」は1'11.300での4位となるが、ハンディーを活かせば上位に食い込むチャンスはある。



序盤

決勝はスタートからNo.110「アライメント浜松シティー」が快調に飛ばし1位をキープする。

決勝での挽回をはかりたいNo.449「金沢工業大学スターレット」であったがスタートから15分のところでマフラートラブルで緊急ピットイン。修理に15分ほどを要し遅れを取ってしまう。

スタートから1時間を経過しようかというところで、No.110「アライメント浜松シティー」にエンジントラブルが発生。ピットに戻っては来たものの、再びコースに戻ることが出来ずここで無念のリタイヤとなる。



リタイヤした No.110「アライメント浜松シティー」に代わって1位に躍り出たのは No.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」。1時間経過時点で51Lapを周回する。

これを追う2位はNo.56「COCPIIT高橋N+EP91」で49Lapとまだまだ先はわからない。

3位の No.449「金沢工業大学スターレット」は序盤でのマシントラブルが響き、37Lapにとどまる。



終盤

スタートから1時間15分が経過したところで、3位のNo.449「金沢工業大学スターレット」が1コーナーでコースアウト。車両は洗車場に向かい、再びタイムロス。さらに車両復旧後にコースに戻る際、ピットエンドシグナル無視の違反を犯してしまい、3分のペナルティストップも命じられる。

これでトップ争いは完全に2台に絞られる。

2時間を経過した時点での1位は引き続きNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」で、86Lapを周回する。

2位のNo.56「COCPIIT高橋N+EP91」は81Lapで、残り時間を考えると優勝は厳しくなってくる。

最終結果

最終的にトップでチェッカーを受けたのは120周を走りきったNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」であった。ピット時間のハンディーがあったとはいえ、1000cc以下のマシンが優勝を飾るのは初めての快挙。安定してラップをきざみ続けた結果であったといえよう。

2位は116LapのNo.56「COCPIIT高橋N+EP91」。終盤にトップとの差を詰めたものの、1位には届かなかった。

3番手でチェッカーを受けたNo.449「金沢工業大学スターレット」は途中のアクシデントで周回数が伸びず81Lapに終わる。規定周回数(完走扱いとなる最低周回数)が84周であったため、残念ながら完走の認定にはならなかった。

今回、1000ccのマーチが勝ったことで、旧ヴィッツレースの車両などでも勝負が出来ることが証明された。

シリーズポイント争いでは、開幕戦での上位2チームが、第2戦でポイントを獲得できなかったため、ポイント争いは混沌としてきた。

第3戦でシリーズ争いを頭一つリード出来るのはどのチームなのか。



3 Cクラス(1501~2000ccのNA車と、1201cc~1800ccのターボ車の、改造範囲の狭いクラス) 毎回バラエティーに富んだ車種が集まるこのクラス。第2戦ではプジョー106と、アコードが新たに参戦。

開幕戦では No.830「CLNシビック」が優勝したものの、2位の No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」、3位の No.8「チームグローバルインテグラ」はそれぞれ1周差につけているだけに、どのチームが上位に来るか予想がつかない。

予選

予選1番手に付けたのは前回の勝者 No.830「CLNシビック」であった。1'03.741をマークして総合でも3位のポジションをゲットする。

2番手には前回リタイヤでリベンジに燃える No.28「アクセントBスターレット」が1'03.954のタイムで入り、No.830の直後に付ける。

3番手は今年より箱換えをして初参加となる No.106「D&Mプジョー106」が入る。タイムは上位2台にひけを取らない1'04.106をマーク。

以下4位の No.111「StecAE-1ファジートレノ」が1'04.371、5位の No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」が1'04.460と、1位から5位までがわずか0.7秒の中に入る大混戦となる。

初参加の No.450「味長持ち3時間アコード」も1'05.516の好タイムで6位に付ける。

また、前回3位の No.8「チームグローバルインテグラ」は、マシントラブルのため予選を走ることなくレースを終えてしまう。

序盤

レース序盤、1位の座をキープしていた No.830「CLNシビック」であったが、スタートより30分が過ぎたあたりで突如のペースダウン。駆動系にトラブルが発生し、早々にリタイヤとなってしまう。

1時間が経過した時点では、1位の No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」と2位の No.106「D&Mプジョー106」が同一の51Lapで並ぶ。これを3位の No.111「StecAE-1ファジートレノ」と4位の No.450「味長持ち3時間アコード」が50Lapで追うが、残り時間はまだ長く、どのチームにもチャンスが残る。

5位の No.28「アクセントBスターレット」は早目に義務ピットを消化したため、周回数は46Lapにとどまる。

終盤

2時間が経過した時点でのトップはなおも No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」。84周を走行し、2位に1周の差を付ける。

2位には No.111「StecAE-1ファジートレノ」が浮上してくる。しかし3位の No.106「D&Mプジョー106」も83周の同一ラップ。

さらに4位の No.28「アクセントBスターレット」は82Lap、5位の No.450「味長持ち3時間アコード」は81Lapと、勝負は最後まで全くわからない状態。



最終結果

早目に義務ピットインを消化し、後半に猛然と追いつけた No.28「アクセントBスターレット」が、120 周を走り切り見事に逆転優勝を飾った。前回スタート直後にリタイヤと悔しい思いをしたが、見事リベンジを果たした。

2 位にはトップと 1Lap 差で No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」がチェッカーを受けた。終盤までトップを走り主導権を握っていたが、惜しくも優勝には手が届かなかった。

3 位の No.111「S tecAE - 1ファジートレノ」も 2 位と同一ラップの 119 周を走りきってのゴールであった。

4 位には No.106「D & Mブジョー106」が 117 周で入った。終盤まで上位をキープしていたが、惜しくも表彰台には届かず。

5 位の No.450「味長持ち 3 時間アコード」も 115 周を走り切り、アコードというレアなマシンの可能性を見せた。

2 戦を終えて上位チームのポイントが分散しているため、シリーズポイント争いも混沌としている。実力が拮抗しているだけに、ポイント争いは最終戦までもつれそうである。



30クラス(1501～2000ccのNA車と、1201cc～1800ccのターボ車の、改造範囲の広いクラス)

開幕戦でエンジンプローやコースアウトなどのアクシデントが相次いだこのクラス。今回は1ヶ月という短いインターバルの影響を受け、マシン修復が間に合わない車両も発生。

開幕戦で途中まで上位を走行していたNo.83「URG WM CLNシビック」、No.18「T - BODYエクセルインテグラ」、No.1「Fun Drive DXL EF1改」は揃って欠席となり、エントリーチームとしては上位ポイントを狙えるチャンスとなった。

予選

1番手のポジションをゲットしたのは、前回の勝者No.19「YADOKARIシビック」。タイムは1'02.922をマークする。

2番手には今年初参加となるNo.22「NAH・J - WOLFロードスター」が1'06.397で続く。

3位のNo.6「ソーワフレミングシビック」は昨年までの3Cクラスからクラスをチェンジしてのエントリーで、タイムは1'06.686を記録。

前回、スタート直後にリタイヤしたNo.80「ハガクリニックシンワサクソ」は、予選コースイン直後にエンジントラブルが発生し、2戦連続でのリタイヤとなってしまふ。

序盤

60分経過時点でのトップは、予選1位からスタートしたNo.19「YADOKARIシビック」で、50Lapを周回する。

2位にはNo.22「NAH・J - WOLFロードスター」が42Lapで、3位にはNo.6「ソーワフレミングシビック」が40Lapで続き、予選のポジション通りでレースは経過してゆく。

終盤

2時間が経過したところでも、No.19「YADOKARIシビック」が1位をキープ。ラップ数は84周となる。

2位と3位は依然2Lap差での争い。74LapのNo.22「NAH・J - WOLFロードスター」をNo.6「ソーワフレミングシビック」が72周で追いかける展開。

大きなトラブルが無い限りは、No.19の優勝の公算が大きくなってくる。

最終結果

危なげなくトップの座を守り続けたNo.19「YADOKARIシビック」が、120周を走り切り、2戦連続での優勝を飾った。

2位には終始2番手をキープしたNo.22「NAH・J - WOLFロードスター」が110周でチェッカーを受けた。

3位のNo.6「ソーワフレミングシビック」は序盤についた周回差を最後まで埋めることができず、108周でゴールとなった。

冒頭にも述べたが、開幕戦で上位を走行した3台の車両が今回欠席となったが、第3戦以降に復帰してくれば、開幕2連勝を収めたNo.19「YADOKARIシビック」といっても、うかうかしていられなくなるであろう。



